

図書館の楽しみ方

中国研究科 加藤 明子

もともとは物語や小説を読むのが好きで、小さい頃から町の図書館、学校の図書館に通っていました。大学の卒業論文では本の装丁について書いたくらい、本にはこだわりを持っていました。たくさんの本に囲まれて、タイトルと背表紙から想像を膨らませ、それだけで楽しい気持ちになりました。

大学院に進学して、読む本は小説から専門書へと変化しましたが、図書館通いは変わりません。専門書には心ときめくような装丁の本はありませんが、その内容は知りたかったことや知らなかったことを知って、もっと知りたいと思うものがほとんどです。読む本ごとに新しい発見があり、どんどん欲張りになっていく気がします。



大学院での私の研究テーマは、中国の陶磁器です。陶磁器の研究には、実物を見ることと、実物に触れることがとても重要で、所蔵美

術館にお願いして見せてもらうこともあります。けれども、すべて見せてもらえるわけではありません。その場合、美術全集などの図版で代替することになります。大学図書館に中国図書はたくさんありますが、その中の美術書となると決して多いとは言えません。美術書は本自体が大きくて価格も高く、個人で持つにはかなりの負担が感じられます。できるだけいい図版を見たいと思うと、なお一層のことです。

このように欲張りで愛知大学においては特殊な研究分野の私に対し、大学図書館は大いに応えてくれます。所蔵場所がわからなかったら教えてもらえるし、他大学の本も借りてもらえます。じっくり読みたい本は購入してもらうことができるし、大きな図版の高価な美術書も見ることができるようになりました。とても満足しています。

大学図書館には専門書にのめり込んでいく楽しさがあります。本当に知りたいと思うことがあったら、カウンターで職員の方に相談することをおすすめしたいと思います。